

未然防止・初期対応の重要性と学校における支援のあり方

東京学芸大学 教授 小林 正幸

今年、福島県内の子どもたちと、福島県内の放射線の少ない所でキャンプをした。東京の小金井市で、不登校を3年間で半分にした時のノウハウを使って、不登校の子40人ぐらいをキャンプに連れて行ったところ、24人中20人が2学期に学校に帰っていった。このキャンプのノウハウを使って、福島のあるさとに戻ることのできない本来TPSPを処方するであろう子どもたちを対象に、仮設住宅に住む保護者向けの子どものケアの冊子作りをした。

兵庫県は、長期欠席が多い方だが、長期欠席というと、大阪がダントツで、兵庫は、不登校をつい最近まではその他や病欠にしていることが多かった。不登校というと、学校の先生が教育問題として扱う。しかし、それを病気として扱うと病気だからという形で手を離してしまい、さらに、その他にしてしまうと、教育の問題ではなくなってしまふ。

1 教師の意識と不登校予防の関連

平成13年から熊谷市で不登校対策に取り組み、3年間で6千人の欠席日数を3分の2に減らした。熊谷市では、年間15日以上欠席した子どもについて、学校の方から個票と呼ばれるチェックリストを出してもらい、それに対して専門家のコメントを戻していくというスタイルをとっている。

平成14年から3年間、熊谷の小・中学校の先生にアンケートを取った。有効回答率は、71.8%だった。

専門家にコメントをもらった先生に「もしも、不登校の子どもの担任となったら、以下のことをどの程度行いますか?」と10項目ぐらいお尋ねしていった。

その中で、明らかになった効果的なかかわりは、次の4点である。

- ①本人の好きなこと、得意なことを探り、その面で付き合うようにする
- ②本人が安心していられる場所を作る
- ③活躍の場を与える
- ④周りの不安や緊張や怒りや嫌悪などの不快な感情を言葉で表現できるように促す

学校復帰させた先生と、不登校にしなかった先生は、これらの項目を高く評価していた。不登校の子どもに対してすべての教師が、この4つの項目を必ず出来るようになったら、不登校は確実に減る。これが、今日の結論です。

2 教師の意識と長期欠席者の関連

神奈川県下の18の中学校で調査を行った。この18の中学校は市から研究指定を受け、何らかの不登校対策を行っている学校である。これらの学校の先生に意識調査をした。

「もしも、不登校の子どもの担任となったら、以下のことをどの程度行いますか?」と質問した。

- ①欠席が見られたら、積極的に働きかける
- ②本人と会い、話をしようとする
- ③保護者と連絡を取り合う
- ④同僚教師や相談員に相談する

不登校対策をやっている中学校で、全職員ができるかについて、必ずするからしないまで、5点、4点、3点、2点、1点で評価すると20点満点で18点である。これらは、教員ががんばろうとしている中学校なので、全体では効果が上がっている。

学校の全教職員対象に、次の6項目で評価してもらった。

①本人の好きなこと、得意なことを探り、その面で付き合うようにする

9割以上できたなら5点、7割5分なら4点、半分じゃないかと思ったら3点。後で平均何点を超えていれば不登校が減ると言えるかを言います。

②本人が安心していられる場所を作る

保健室じゃないと安心していられる場所がつかれない学校は0点。

③登校時にはあたたかい声かけをする

先生方は、みんなやっているよ。他のクラスの子にも、8割がたは声をかける。

④不安や緊張や怒りや嫌悪などの不快な感情を言葉で表現できるように促す

これができる学校の先生が多いのは、メンタルヘルスが良い学校である。こちらが言葉で代弁する。「いやなんだね」「さびしいのね」「いやなかんじがするね」と感情を受け止める。その上で「でも、やろうね」と勧めるので良いのである。

感情を受け止めることと行動を許容することは違う。感情を受け止め、行動を許容しない。この区別ができていないとだめです。

⑤本人をめぐる仲間関係に配慮する。

これは結構先生の多くは高く評価する。

⑥複数の先生でチームを作りかかわる

小学校の先生は低い。

9割で5点、7.5割で4点、半分で3点、2点、1点

全部できると、30点。神奈川県の中学校の平均は、23点でした。23点よりも高ければ、不登校は減りました。23点以下だと不登校は増えます。

地域が変わっても、このように先生の受容・配慮の意識が高いと不登校は減ります。

3 不登校・長期欠席が意味するもの

不登校とは、何かというと子どもが学校に合わないのではなく、集団が子どもに合わないのである。子どもが学校に合わないのは、学校が子どもに合わないのである。集団不適応というのは、集団が子どもに合っていない。

不登校の何が悪いことなのかというと、子どもと学校との関係が悪いことが悪い。

子どもは、学校教育を受ける権利がある。学校や保護者はその権利の保障をする義務がある。

学校に行けていないことは、悪いことではない。ただ、子どもの状況が、子どもが学校に合わないということで不登校が起きているとすれば、学校がその子に合わないことが悪いと言える。また、不登校であるとしても、そのことによって、教育を受ける権利が保証されることが望ましい。

不登校そのものが、教育の問題になるというのは、学校教育の子どもへの適合性の問題の指標であるからである。

4 不登校予後調査から

さて、中学校3年生 25,000人にとった調査の中で、平成10年(5年後)に二十歳になった時、当手を振り返って30日以上欠席したきっかけは、何ですかと不登校体験者にお尋ねをした。

不登校のきっかけは、1番「学校の中の友だち関係」、2番「学業の不振」、3番「先生との関係」、4番「部活動」、5番「入学・転校・進級でなじめない」であった。要は、ワースト5は、学校に合わなかった、学校に仲間がいない、学校の中での友だち、学校の中での活動、これは逆に二十歳になっても思い当たることがある。

逆に、思い当たることがないが1割ということは、9割が子どもはそのきっかけを覚えているこ

とを示す。子どもたちが不登校になったきっかけを言わないのは、この大人たちには言っても解決してくれないと考えているからではないか。

5 不登校の形成要因

「なぜ、不登校になりました？」と聞くと、「学校の中で辛いことがありました」と答える。5年たっても、10年たっても覚えていると言うほど大変なことである。5年たっても、9割の人は嫌なことだと思っている。そのつらいところから、逃れたいという気持ちから、不登校になる。ストレス反応では、身体症状、不安反応、無気力反応がある。このうち、無気力反応は抑鬱反応と言っても良く、子ども自身活力を失って、何かをやる気がなくなっている。取り組む元気が出ない。体の症状がより深刻化している。こういった症状がでてきたら、危険である。

学校にいるうちに、体の症状、不安に思える症状、無気力に見える症状、怒り反応が見られたら、子どものSOSだと考えるのである。

6 不登校を抑制する要因

ストレスがあったら、どうするか？みなさんに尋ねたところ、多くの方は発散系を答えた。ただ一人だけ、「話を聞いてもらう」という人がいた。この場合、ストレスの原因について話を聞いてくれて、「こんなふうにやってみたら」とか「私は、こうやっているけど」というアドバイスをもらう。そのアドバイスに、問題を解決していくアイデアが含まれている。前者を情動志向、後者を問題志向と言う。

つらい部分を発散で解消していく、不快な感情を言葉で表現していくには、どうしたら良いとかというと、ストレスの種類によって違う。例えば、職場の関係とか、子どもの学校の関係や友人関係とかで、親しい誰かとワアーとはしゃぐなどして、それをOKと言ってくれる仲間がいると、学校でうまくやっていける。

私の研究から、人とうまく付き合っていく力、がんばる力・我慢する力があれば、学校生活を楽しむことができる。また、教育基本法第一条、教育の目的は、自分の力で社会に貢献できる、夢を持ちながら社会に貢献できる、自分で立とうとする意欲・態度そういう人格を形成していくことが書かれている。人とうまく付き合っていく力、がんばる力、我慢する力があるということ育てるのが、本来の教育の目的である。がんばる力・我慢する力は、全ての教科領域が育むものである。何をがんばるか、何を我慢させるか、それが、教育の本来の目的でもある。そして、公教育を集団でなぜ行うかということ、社会の中で、人とうまく付き合っていく力を育てることが、目的となっているからである。

この2つの力を育てるのは、本当は、学校教育の目的のはずである。この2つの力がない子どもたちは、学校教育が楽しめていない。この2つの力のない子に、力をつけるのが、本来の学校の使命ではないか。社会環境の中でこの2つの力が、人を成功させたり、上手く生かせたりするのが、健康な社会である。この2つの力を子どもに育てていくことが大切である。

もう一つ、不登校にブレーキをかけるのが、ソーシャルサポートである。ソーシャルサポートとは、支えてもらっている、支えられている社会のこと。実際に支えてもらっているという感覚が大事です。支えられていると思えば思えることができるとストレス反応は下がる。自分は何ものかに支えられていると思うことが大事である。

自分が支えられていたという感覚が強ければ強いほど、支えられていた体験が多いほど支えられている感覚も強くなる。現実での支え手は、保護者や友だちや先生である。保護者が大変な時に、子ども自身が打たれ弱くなってしまっている。支えられている感覚が育っていない。いじめられた体験をしてきた人ほど打たれ弱い。いじめられた体験があったり、過去に虐待された体験のある人、

震災に遭ったり、打たれ弱かったりした人は、不登校になりやすい。支えられているという感覚が少ない場合、つらい場所から逃れるため不登校は始まる。

7 不登校はなぜ続くのか

この話は、今日のメインです。欠席が続くことで、新しく不登校を続けさせることが発生する。

全ての子どもが、学校にいてOKという感覚を増やしていくことができれば、子どもは不登校にならないし、不登校になった結果、子どもが教育の機会を失うこともない。がんばる力・我慢する力は、教育の中で本来育てることができる。学校が嫌になってくると、学校に来ることが嫌になってくる。感情面で、嫌なことを繰り返し思い出してくるとますます嫌になってくる。嫌なことを思い出してくると別の学校も嫌になってくる。対象も広がっていき嫌になっていくことが繰り返されてしまう。学校に行きたいと思っていたら、学校に行けない自分がどんどん嫌になる。私は、ダメで力がないという認識が生まれる。そして、ますます不快感が強くなっていく。この悪循環が繰り返してしまい、時間が経過してしまう。

8 小中連携支援シートの成果

南足柄市の成果

学校で欠席があったら、その子の名前と欠席理由を書いて教育委員会に出す。その理由を見ていて、体の調子が悪いとか、原因が不明なとき、教育委員会から電話がある。そこで、教師が体の調子が悪いと言ったら、先生が「おなかがいなかったの?」「病院に行ったの?どうだったの?」「よかったあ」というかかわりが増える。その結果、不登校が減る。それだけで、1割強は減る。

小中連携支援シート、小学校1年生から小学校5年生までに、どこかで15日欠席した子どもや6年生は2学期までに10日以上欠席した子どもについて、A4版1枚に、「小学校では、こう対応しました。中学校では、こう対応しました」と書いてあって、教育委員会を介して、僕から「この子には、こうしていったらいいですよ」とA4版に約3ページに書いて戻していく。小学校の学級の先生にもどし、同じ内容を中学校の進級した先生へ送るという形のことをやっていった。その結果、1年で半減した。

新潟市の成果

新潟でも、同じようなことをやった。

月に15日以上欠席の子の個票に、理由を書いて出す。それに、専門家の助言「こんなかかわりが、いいですよ」と、個票に書いて返す。別の県の実践だが、非行型の不登校でも、全校の先生がその子と話し合い、かかわっていったら、不登校にならないだけでなく、非行も減った。

秩父市の成果

秩父福祉保健総合センターで、保健師さんがその子がお母さんのおなかに入った時から、幼児の各健診を受けているときから、ずっと子どもを見てきて、小学校入学まで、思春期になって青年期になって、病気を持つようになって、ずっと子どもにかかわって、小学校・中学校・高等学校の期間を通して、あの子が、こうなったと保健師さんに、メンタルヘルスの観点から、子どもを観ていってもらった。ここでは、全国の倍の不登校出現率が、5年間で全国の半分の出現率になった。

A市の成果

入学前に、共通理解をする。入学後に、もう一回共通理解をしてくださいと教育委員会から、学校に投げかけ、校区ごとに小中連携支援シートを活用するようにした。

結果が出た翌年に聞き取り「どうでしたか」と尋ねた。A中、B中は、言われた通りに、入学前に学年全員で読み合わせをした。そして、入学後1ヶ月後に、子どもの顔がわかってから、もう一度全員で読み合わせをした。

C、D、E中は、全員で読み合わせをした。F中は、全員で個別に読んだ。

学年全員で読み合わせをして、この子は、こうかかわろうと意思決定をすることを、A、Bは2回、C、D、E中は、1回、F中は、0回だった。読まなかったわけではない、全員で読まなかったのである。F中も個々に読んだのである。だけど、やっтерることがばらばらなので効果はでない。

予防の2段階

予防には、2段階ある。一次的予防は、問題の未然防止。

2次的予防は、早期発見・早期対応である。

未然防止に段階がある。

予防論は、なぜ不登校が起きてくるのかということ。

治療論は、なぜ、不登校が続くのかということ。

一人の不登校の問題を解決していくうちに、二人新しい不登校の子が出てきたら、不登校は増えていく。一人の不登校を解決するのに仮に1年ぐらいかかるとする。その時間の中に二人新しい不登校の子がでてくれば倍増である。この流れが続くと、不登校は減っていかない。減らすために何が必要かという、この流れを変えることである。

まず、嫌なことが存在しないようにすることが大事なことです。学校の中に、教室の教育環境を整えることがとても大事なこと。問題を解決できるような力を育むことが、教育の目的である。教科領域を通してがんばる力・我慢する力、その中に人とかかわる力を育てていくのが、本来の教育の目的です。その力が育っていないということは、教育の力が落ちてきているということに繋がっている。

不登校の未然防止や早期対応で活躍できるのは、全教師しかいない。欠席理由が、体の不調だとかかわりやすい。行動でわかる。教室にいたがらない。何かをしたがらない。

天気の良い日に、朝礼台の上に寝そべてみる。すると、不安や緊張の高い子がまわりに集まってくる。そういう子と仲良くなるために、先生は照度を落としてみる。すると、見えてくる。先生がONで、元気にでると見えない。

9 不登校の二次的予防

不登校の早期対応

○問題点を取り除くには

- ①学校で嫌なことが存在しないようにする。
- ②ストレス発散も、子どもが自分で問題を解決することができるように手伝う。
- ③様々な人に支えられていると思わせる。仲間関係のトラブル、学業面でも、不安を改善してやる。
- ④欠席者への積極的なかかわり
一歩進めるには、子どもが学校で快適に感じる機会を増やす。
- ⑤得意なこと、好きなことを見出し、その面でかかわるようにする。
- ⑥活躍の場を与える。
- ⑦安心していられる場所をあたえる。

このことを、全ての子にしていけば、仲間関係のトラブルが減るし、楽しいことが増える。

○問題の解決を手伝う。

①不快な感情を言葉で表現できるように手伝う。子どもの表情を捉えながら、不快感を言葉にすることで、子どもの不快感は減少する。

「悲しいね」、「さみしいね」、「つらいね」、「こわいね」、「いやなんだね」

②解決策と一緒に考える

「やれる?」「どうやる?何か手伝ってほしいことない?」本当に自分で決定して、解決していくには、どんな言葉かけが必要なのか。

子どもが自分で乗り越えたと思わせることが大切です。

川上りする子どもにスタッフが寄り添う時、子どもが自分で流れに向かって歩いていき、「危ない」と思ったら、手があったと感じさせる。でも、押し返さない。自分から出て行くまで待つのが、寄り添うということなのです。

○苦戦している状況をさまざまに支える。

直接的支援として、子ども本人に分かる形で支援するとき、必ず本人にOKを取るということが大切です。いじめへの対応で、加害者へアプローチをかける時、被害者にこういうアプローチをかけるという確認をしてからやること。クラスの子からかかわってもらった時、呼びに来てもらおうかどうか、その子にとってだれが良いのかという確認をしないと、子どもにとっていいかわからない。

保護者への家庭訪問の時間のメニューを出す。学校のできる時間を提示し、お母さんとしては、どうですか。学校でやれることを想定し、このメニューとこのメニューどちらがいいですかと聞く。約束なしに、こっちの思いでやってはいけません。

子どもに聞くときも、「本人の確認もとってくださいね」「本人何って言ってましたか」と本人の意志確認して、「じゃあそうしましょう」という形の支援をすることが大切である。

10 不登校の一次的予防

がんばる力とは、当面の目標のことで、したくないことをやる。我慢する力とは、したいことをあえてしない。がんばる力を培うには、できた自分、乗り越えた自分を意識化させることが大事で、一緒に喜びことで伸びを指摘し、一緒に喜びることが基本です。

学校の授業では、このように構成されていませんか?教科領域によって違いますが、「ここまでは、わかっているね、君たち」「ここまでは、できるよね」と、最初の授業のはじめに提示をして、「これから先ここまでいきたいけど」「まず、ここをやりたいと思っているんだ」と今日の目当てを提示し、今日の目当てまでは、達成したと確認するのが授業の工夫です。

昨日に比べて伸びている自分を見ている、これががんばる力になる。我慢する力は、褒めたり叱ったりすることによって伸びる。この二つの組み合わせを育てているはずである。育てているものの中の思考力であったり、文章力であったりが伸びていく。次の時間で「できるようになったぞ。だから次に向けてもうちょっとやってみよう」と伝えれば伸びたという実感ができる、確認の時間ができるほうが、人はやる気になる。人を育てるということは大きなことで、そういう教育を高めると不登校が減っていきます。

【質問】

(参加者)

先生が話されたことと関係あると思うが、全校で 210 名程度の小規模校であるが、全校で 10 人の不登校がいる。規模にしては多いです。学校はベテランの先生が多く、きちりと指導する先生が多い事に対応できない。しんどい事をしないといけないのがつらい。そういう子たちに居心地が良い学校にしないといけないが指導としては難しい。怠惰な部分が多い生徒に対してどのように対応すれば良いか。

(小林先生)

やった甲斐がどれだけあったかを感じさせるのが問題。知り合いの教え方の上手い人はストップウォッチャー。最後のタイムを計るときに少し早いタイムが出るようにする。始めた時より、昨日より、少しでも伸びていて、OK と思ったら今日は、やった甲斐があったという。そういう工夫がされているかどうか。